霊〇新〇の献身
7

霊◯新◯の献身　7

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19780781

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 最霊, ♡喘ぎ

最霊です。ですが師匠総受けです。今回は♡喘ぎを含みます。お好きな方はお付き合いください。

ネタバレ
死ネタ注意ではない……だと……！？（つまりそういうことです）

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

霊◯新◯の献身　7

濁る視界。
全身が痛む。
「こいつの臓器なら商品になる」
酒焼けした声。
「早く殺そう」
抵抗しなければ。
霊幻が手を出鱈目に振り回す。
「くそっ、大人しくしろ！」
男が拳を振り上げて。
「霊幻さん──！」
「ぎゃあっ！」
光の鞭がその男を締め上げ、一瞬で沈黙させた。
「大丈夫ですか！ああ、酷い怪我……！」
凛とした声に怒りが混じる。
霊幻はかすむ視界を必死に瞬きをして晴らしながら。
男が息をしていない事を確認した。
「大変だ……！蘇生措置をするから、テルくん、心臓マッサージを頼む」
「…………分かりました。あなたがそう言うなら」

ザザッ、とノイズと共に場面は切り替わって。
山の中、霊幻は必死に縄で男の死体を締め付けている。
「霊幻さん……」
「テルくん、大丈夫だ。俺に全部任せておけ。……土を掘るのを頼む」
霊幻は男の手を取り、伸びた爪で血が出るほどに頬を引っ掻かせた。
「ヨシフに連絡しないと」
ピタ、と記憶は停止する。

「結局全てただの過剰防衛じゃないか」
「問題は、やったのが全員超能力者だった、ということだ」
呆れた最上の声に、のんびりと霊幻は応える。
「そうだな。君が大事にしている子たちばかりだった、ということだな」
「……」
「キミ１人の命で、キミの大事な人が３人も助かる、という按配だ。……馬鹿馬鹿しい！」
最上が両手を空に掲げると、全ては鏡の破片に変わり、夜空に散らばった。
「真実が明るみになれば、アイツらは３人とも研究対象として一生自衛隊で飼い殺しだ。……みんな、俺を守ろうとしただけなのに」
ふぅわりと夜空に浮かびながら、霊幻は俯く。
「ああそうだな。みんなお前に劣情を催していた。だから能力に感情が乗り過ぎて、暴走してしまったんだ。……罪な男だな、霊幻？」
ぱっと上げた霊幻の顔がほんのりと赤くなっている。
「お前の罪はそれだけだよ、霊幻。……殺人の罪は、各人が償うべきだ」
「必要ない。俺が死刑になれば、あいつらはこれまで通りの生活を送れる」
はあ、とあからさまに最上はため息をついて、すぅっと霊幻に近づく。
「無実のお前を死刑台送りにした連中が、のうのうと今まで通りに暮らせると本気で思っているのか」
まつ毛同士が当たるほどの距離に迫力がある顔が迫る。
それは人生の明暗を見てきた、賢者の顔であった。
「そ、れは」
「キミは贖罪のために３人の人生を使わせようとしている。愛する人を死に追いやったものがどうなるのか、【見せてやろうか】──？」
こく、と霊幻の喉が引き攣れて音を立てた。
「……知ってる。モブから聞いた。でも俺には……これが最善だっ

たんだよ……」
「……」
人を助けようとして、結果的に不幸を増やしてしまう。
最上はそういうことがあることも、痛いほど知っていた。
「最上さん……」
霊幻はそっと最上の頬に両手を添える。
「れ、いげん……」
突然の霊幻の行動に戸惑う最上に、目を閉じた霊幻の唇が近づく。
「あっ、そうだ！」
ぱっと霊幻は身体を翻し、最上の思わず抱きしめようとした手は空を切った。
「デートしようぜ、最上さん！」
「……でーと？」
「殺人現場ばっかり見てたら気が滅入るだろ。折角俺の精神世界に居るんだから、楽しいところも見ていけよ」
「くだらん……」
「俺に残された時間は少ないんだからさ、思い出を作らせてくれよ、な？」
するり、と霊幻に手を握られて、ピクリと最上は身体を揺らす。
「……まあ、いいだろう。どうするのかね？」
「水族館に行こう！」
霊幻の言葉と共に、目の前に巨大な三角形を組み合わせたデザインの建物が現れた。
「小学生の時に親が連れて行ってくれたんだ」
「……だからやけに巨大に見えるんだな」
２人は入り口をくぐる。
「ほう……」
周囲の水槽には、色とりどりの熱帯魚が泳いでいる。
「この透明なエビ、やたら記憶に残ってるんだよなあ」
水槽を覗き込む、きらきらした目の霊幻の横顔を、最上は見ている。
「あっ、見ろよ最上さん！」
「うん？」

壁から天井まで覆う巨大な水槽を霊幻は指差す。
「グッピーの群れだ！」
キラキラと光を跳ね返すグッピーは。
「これは……なんと……」
虹色のガラスで出来ていた。
荘厳な光の揺らめくガラス・ショー。
２人はしばしその光景に見とれる。
「行こう、もうすぐショーが始まる」
霊幻が最上の手を引く。
途中の『川の生き物』コーナーでは、河童が手を振っていた。
「イルカかね？シャチかね？」
座席に座りながら、最上は意地でも霊幻の手を離さずに訊ねる。
にっ、と霊幻は笑って。
「人魚だ！」
最上はもはや、絶句した。
人魚たちは鮮やかな鱗を存分に見せつけながら水中で踊り遊び、その見事な歌声を存分に披露した。
「面白かったなー」
「……一体キミはどこの水族館に行ったんだね……」
この世界は霊幻の記憶から出来ている筈である。
彼の目にはこう見えた、ということなのだろうか、と最上は眉根を寄せた。
「あっ、この水族館の目玉だぞ！」
巨大な水槽に霊幻は駆け寄り、最上も手を引かれて走り出す。
「ああ、シロナガスクジラ……」
最上はチラッと水槽の説明文を読む。
「違うぞ！」
巨大なクジラの後ろから。
「シー・サーペントだ！！」
白銀に輝く、優雅な水竜が泳いで行った。
「……見事だな」
「だろ！？」
最上はもはやツッコミを放棄した。

「疲れたな、ちょっと休憩しようか」
水中ドームになっている休憩所には、真ん中に大きなフカフカのベンチが置かれていた。
無数のクラゲが、ふよふよと漂っている。
「クラゲがシャボン玉で出来ている……」
「綺麗だな！」
ベンチに座った２人はしばしシャボン・クラゲを眺めてから、自然とお互いを見つめた。
「最上さん……」
霊幻は最上の首に腕を回し、ぐいと引いて、押し倒させた。
「！」
最上は驚いて、反応ができなかった。
「……いいのかね」
何とか絞り出した最上の声に、霊幻の瞳が恋に潤む。
「俺が孤独に壊れそうになった時に、アンタが来てくれた。たった１人、最上さんだけは俺の無実をいっぺんたりとも疑わなかった……俺の無実を証明するために、飛び回ってくれる貴方を、俺は……んっ」
深く、激しく口付けて最上は霊幻の言葉を封じる。
「……私が言えない事を、キミにだけ言わせる訳にはいかない」
最上の顔が霊幻の首筋に埋まり、荒々しく手がグレースーツを乱す。
「ん……っ」
性急に霊幻に触れる最上の膝が霊幻の股を押し上げ、鋭い快感に霊幻は鼻にかかった声を漏らした。
「キミの全てに触れたい」
発情した最上の顔に、うっとりと霊幻は目を細める。
「最上さ──」
「啓示でいい。……いや、そう呼んでくれ」
「……啓示さん。俺のことも、新隆って呼んでくれよ」
「新隆君……！」
シャツのボタンが飛ぶ。
「あっ」

最上は唇で、手のひらで、霊幻の胸や腹をせわしなく撫で回して堪能した。
「啓示さんも、脱いで」
する、と霊幻は最上のジャケットに手をかける。
「……ああ」
最上はジャケットを脱ぎ捨て、ハイネックのシャツをたくしあげて脱ぐ。
「……引き締まってる」
「この仕事は、身体が資本だったからね。……キミはもう少し鍛えた方がいいんじゃないかね？」
う、と霊幻がつまるのに、くっくっと楽しそうに最上は意地悪い笑みを浮かべる。
「キミには霊能力者の先輩として、言ってやりたいことがゴマンとある」
「お手柔らかに頼みます……っあ！？」
胸を撫で回していた手が乳首をかすめて、霊幻は目を見開いた。
「ん？気持ちいいかい？」
「あっ、ァアっ、っん、ぅん……っ」
しつこくいやらしく胸を手でいじる最上に、震えながら霊幻は頷く。
「そうか。なら口も使ってやろう」
つん、と人差し指の爪をぐにと乳首の先端に埋めながら、パクリと最上はもう一つの乳首にかぶりついた。
「ァアっ！やだぁっ、啓示さぁんッ！」
「……っ、もっと呼んでくれたまえ。たまらん……」
「ぁ、あああっ」
指で、口で乳首を責められて、霊幻は思わず自らの小指を噛む。
「ンンンっ、んっ、ん……！」
硬くした舌先で乳頭を捏ねるようにいじめると、霊幻の腰が揺れて擦り付けるように淫らに踊るのに、最上は目を細めた。
「そろそろコッチが切ないか？」
優しく、ねちっこく股間を揉まれて、霊幻の身体が跳ねる。
「啓示さん、こそっ……！」

負けじと霊幻もテントの張った最上の股間を撫で上げた。
「！……煽った責任はとりたまえよ？」
思わず最上の片目が黒くなる。
「ハッ、お互い様……！」
霊幻は最上のズボンのボタンを外して、ジッパーを下げる。
「……っ」
最上もまた、震える手で霊幻のベルトを外し、スラックスの金具を外して、ジッパーを下ろした。
そのままスラックスを脱がせる。
「パンツはそのまま？」
「大事に脱がせたい」
「……すけべ」
すり、と誘うように霊幻は白い足を擦り合わせる。
ごくりと唾を飲み込みながら、最上はズボンと下着を脱ぎ捨てた。
「キミのは形が良さそうだな」
「ん、っ」
「睾丸もちょうどいいサイズだ。バランスが良い」
「は、ぅっ」
ボクサーパンツの上からねっとりと陰茎や睾丸を触られて、じわりとパンツにシミができてきた。
「嗚呼、素晴らしい……」
「も、いいだろ！？」
根を上げた霊幻が叫んだので、ニタリと笑って最上はボクサーパンツのフチに指をかける。
「あ……」
ゆったりと、はしたなく勃起したモノを見せつけるように、最上はパンツのフチをずらし下ろしていった。
「ほほう、可愛らしいものだ。キミは色が薄いから、性器もピンクなんだな」
「〜〜〜〜っ」
辱めに、ぷくりと性器の先端に粘液が乗る。
それをわざと最上は、すんすん、と嗅いだ。
「……いやらしい匂いがする」

「も……っ、ゃだあ……！」
羞恥で顔を隠した霊幻の腕を、下着を脱がせてから最上はどける。
「たまらんよ、新隆くん。どんないやらしい顔をしているのか、キミに見せてやりたい」
「啓示さ……あっ！？」
先走りで濡れた陰茎同士を、最上は腰を揺らして擦り合わせる。
「んっ、んんっ、ン……っ」
ゾクゾクとした快楽に、霊幻はまた思わず小指を噛む。
「指を噛むな。傷になるぞ。どうしてもというのなら、私の指を噛みたまえ」
最上は霊幻の指をそっと外し、左手の指を差し込む。
「左手の薬指を。……思う存分に」
カッ、と霊幻の頬が金魚のように赤くなった。
「ふぇいじさ……あ！」
最上は空いた右手で２人の陰茎をまとめて握る。
その手の中で、腰を前後させた。
「あ、あ！あう、ああっ、あ……っ！」
思わず霊幻は最上の肩を掴む。
「イきそうかね？」
最上に霊幻は必死に頷く。
「そうか」
淡々と最上は言って、ごしゅっと強く陰茎を擦り上げた。
「あぁ……っ！」
「……っ、く……」
２人は吐息混じりの甘やかな声を漏らして達した。
は、は、と荒い息を整えながら、２人は射精の刺激が引くのを待つ。
「さぁて……」
最上は２人の精液を掬い上げて、霊幻の後ろに塗り込む。
「ん？狭いな……」
「何ぶん処女なもので！」
「処女と童貞か。万全とは言い難いが、浪漫があるな……さて、しかし、無理に挿れると精神が傷付くな……。精神に干渉して広げて

もいいが、折角だ。手順も愉しもう」
最上はゆっくりと中指を出し入れしながら、霊幻の後ろにうずめていった。
「ん、う……」
「辛いか？」
「へ、いき……っ」
苦痛に耐える霊幻にきゅうんと最上の胸が締め付けられる。
霊幻は最上を受け入れようとしているのが分かるからだ。
「そろそろ２本目を挿れるぞ」
「ん……」
くぷ、と指を呑み込む後孔が、チラリとピンクの内部を見せて最上を煽る。
腹につかんばかりにそそり立つ怒張に、更に張りが増す感覚がした。
「……３本目だ」
「ん……ぁっ！？」
びくん、と霊幻のからだが跳ねた。
「痛かったかね！？」
「ち、がう……そこ、いつもの、とこ……」
はたと最上は思い当たる。
霊体で散々なぶった前立腺は、確かにこの辺りだった、と。
「気持ちいいかい？」
「ゃ……ぁん、トントンするなよぉ……」
霊幻の手が最上の背中をまさぐる。
それがゾクゾクゾク、と最上の性感を刺激した。
「……っ、もう挿れたい……ッ」
「いいよ、お互いを散らそうぜ」
啓示さん、と霊幻は甘く最上の耳元で囁く。
指を引き抜いた最上は、カウパーでドロドロの性器を、ぐっと霊幻の後ろに押し付けた。
処女と童貞が、散る。
「アッ……！」
ぐぷ、と先端が挿入って霊幻の腹が波打つ。

「熱い……！」
最上は感嘆の声を漏らして、更にぐっと腰を進めた。
「中はぐちゅぐちゅしていて……最高だ……！」
「〰〰〰〰っ、も、ちょっと、黙って……！」
霊幻は最上の上体を引き寄せて唇を奪う。
「ンっ、ンっ、」
規則的な腰の動きに、霊幻の口の端から嬌声がこぼれた。
「新隆君、すまない」
初めて最上の焦った顔を見て霊幻はキョトンとする。
「もう出そうだ」
ふ、と柔らかく霊幻は笑う。
「いいよ、出して」
「すまない……ッ」
「謝らないで」
ぐ、と最上は腰を押し付けて霊幻に受け止めさせた。
「は、あ……っ」
霊幻の内部を味わう最上の顔を、霊幻は愛おしそうに撫でる。
「すげぇ出てる。孕みそうでゾクゾクする」
「……滅多な事を言うな。ここは精神世界だぞ、あり得る話だ」
「えっ」
「怪異を産む羽目になるぞ」
ひえっ、と声を上げる霊幻に、くつくつと最上は笑った。
「本当に勉強不足だな、キミは」
「……優しく教えてくれよ、最上センセ？」
ふ、と煽られた顔で最上は笑う。
「いいだろう」
「ぁあっ♡」
中出しされた精液を擦り付けるように、最上の動きが再開する。
「ぁんっ♡あっ♡あっ♡あ、う！？」
こつん、と奥を叩かれて、霊幻の身体がこわばる。
「やっ♡あっ♡けいじ、さんっ♡なんかっ♡なんかっ、へんっ
♡♡♡」
「……奥か？」

ぐりっ、と腰を捩じ込まれて。
「あぁああぁあっ♡♡♡」
ぐぽっ、と結腸が開いた。
「う、おっ！？」
ちゅうちゅうとした吸い付きに最上も焦る。
「やばっ♡やばいよぉっ♡けいじさぁんっ♡♡」
「あらたかっ……私も、これは……っ」
イかないように力を入れる最上の額に汗の粒が浮かぶ。
「ぁんっ♡」
最上から落ちる汗にすら感じて霊幻の桜色の身体が跳ねた。
「イイっ♡イく、イくよぉっ、けいじさぁんっ♡♡♡」
「新隆っ……！」
「啓示っ……！」
ぎゅう、と２人は抱きしめ合って。
クラゲの水槽からもれる青い光に揺蕩いながら、深い絶頂に溺れて行った。

※

「もはや時間がない。……霊幻さんを刑務所から助け出すには、武力行使しか無いと思う」
芹沢とエクボ、花沢は暗い顔を突き合わせて頷き合う。
「その為には影山くんの戦力は欠かせない。……明日自衛隊の基地を襲って影山くんを助け出し、その足で霊幻さんを攫いに行こう」
「「分かった」」
エクボと花沢の２人は、力強く頷いた。

一方。

「霊幻新隆が収監されて５年が経った。そろそろ超能力者たちも動き出すかも知れない」
「……そうですね」

「霊幻新隆の死刑を明朝、執行する」

「……通達してくれたまえ、ヨシフ」
ヨシフは唇を噛み、俯いて頷いた。

続